

## 境峠・神谷断層帯，境峠断層および霧訪山断層における活動履歴調査

## Paleoseismological studies on the Sakaitoge and Mutoyama faults in the Sakaitoge-Kamiya fault zone, central Japan

# 吉岡 敏和 [1]; 細矢 卓志 [2]; 橋本 智雄 [3]; 金田 平太郎 [1]

# Toshikazu Yoshioka[1]; Takashi Hosoya[2]; Tomoo Hashimoto[3]; Heitaro Kaneda[1]

[1] 産総研 活断層研究センター; [2] 中央開発(株); [3] 中央開発

[1] Active Fault Research Center, AIST, GSJ; [2] CKC; [3] Chuokaihatu Co

<http://unit.aist.go.jp/actfault/activef.html>

長野県西部に位置する境峠・神谷断層帯は、地震調査研究推進本部が基盤的調査観測対象断層帯の1つとした断層帯で、北北西-西南東走向左横ずれの境峠断層と、東北東-西南西走向右横ずれの霧訪山断層から構成される。このうち境峠断層では、2002年に長野県木祖村小木首細島地区において、2003年には同県奈川村(現松本市)寄合渡地区および同ソグラ沢上流の2地点においてトレンチ調査が実施され、過去2回の活動時期についてのデータが得られている(吉岡ほか, 2005)。しかしながら、最新の活動時期が十分に限定できなかったため、平成17年1月に地震調査研究推進本部地震調査委員会から公表された境峠・神谷断層帯の長期評価では、今後30年間に活動する確率はほぼ0から13%と幅広いものとなった。また、霧訪山断層については、これまでに活動履歴調査が行われておらず、将来の地震発生確率も不明とされている。これを受けて、産業技術総合研究所では、平成17年度文部科学省からの委託により、境峠・神谷断層帯の境峠断層および霧訪山断層の活動履歴調査を実施した。

境峠断層では、北部の1地点においてトレンチ調査を実施した。調査地点は、松本市(旧奈川村)ソグラ沢上流で、2003年の調査地点の約60m北にあたる。この地点は尾根状の緩斜面(段丘面)で、これを切って西側隆起の逆向き低断層崖が連続して分布しており、トレンチはこの崖を横切って掘削した。掘削の結果、壁面には明瞭な断層が露出した。断層は段丘堆積物とその上位の礫層を変位させ、黒色腐植土層に覆われているのが確認された。また断層に沿っては、砂礫および黒色腐植土がV字状に落ち込む構造が見られた。

霧訪山断層では、塩尻市(旧榎川村)桑崎と辰野町小野中村の2地点においてトレンチ調査を、塩尻市北小野において地形断面測量およびピット調査を実施した。このうち、桑崎地区のトレンチでは、御岳起源のスコリアを含むシルト層が南に傾斜するのが観察された。また北小野地区では、上下方向に数m変位している開析扇状地面(中田・今泉, 2002)が、スコリアを含むロームを載せることが確認された。小野中村地区のトレンチでは厚い扇状地堆積物が分布し、断層は確認できなかった。